

富者への施し物 —Melvilleの“Jimmy Rose”について

岡村仁一

1. はじめに

批評史を繙くと、“Jimmy Rose”は現在に至るまで、例えば Fisher が「主題の点でも、技法の点でも特に重要であるとは誰も感じてこなかった様に思える (no one seems to have felt that it [“Jimmy Rose”] was particularly significant in regard to theme or technique)」(133) と述べている様に、概して Melville の諸短編の中で、批評家たちからさほど優れているとは見なされて来なかった作品である。しかしながら、注意深く検討してみると、たとえば薔薇という象徴を使った主題の面でも、とかくセンチメンタリズムだと読者に思われがちな、語り手の Jimmy に対する同情を露わにした過度な表現を取って用いて特殊な効果を狙った技法の面でも、実はかなり注目に値する作品なのである。更に晩年の Jimmy の生き方、つまり、最早自らの人生に何も期待していない、にもかかわらず人生そのものに絶望したわけでもない様に思える生き方、人はかくも希望無くして生きられるものなのか、という生き方の秘密には一読者としても注目せざるを得ない。

2. 四度繰り返される詠嘆

この作品を先ず技法面から見ていくと、語り手が Jimmy の悲劇に対し、詠嘆のことばを四度繰り返して使っている点が注目に値する。具体的には

(Ah!) poor, poor Jimmy—God guard us all—poor Jimmy Rose! (339, 42, 43, 45)

ということばになるのだが、最初の二回が “Ah!” という感嘆詞が付いている点を別にする、この四カ所は全く同一のことばが用いられている。またこの表現とは別に、その前に、これから述べようとしている Jimmy の悲劇を予感させる序奏のように二度、

Poor Jimmy Rose! (338)

Ah, Jimmy, Jimmy! (339)

という嘆きの表現が置かれている。これらの表現自体は一見、Sealts の言葉を借りれば「全く感傷的なことば」“sheer sentimentality” (77) と感じざるをえないが、全く同じことばが四度繰り返されている点は、ヨブに悲劇を伝える四人のメッセンジャーの結語がいずれも「我ただ一人のがれて汝に告げんとて来れり」“and I only am escaped alone to tell thee” (Job 1.15-19) であることを思わせ、またそのことばがそのまま *Moby-Dick* の “Epilogue” 冒頭で

引用されているところからも、Melville が「ヨブ記」のこのことばの用法にかなりの拘りを持っていたであろう事は推測できる。

3. Jimmyとヨブ

それでは Melville の心中、Jimmy とヨブとはどのような点で結びついているのであろうか？それはまさに Jimmy の破産がヨブの試練に相当する様に捉えられている点であろう。破産を被った Jimmy は語り手により、「全く悪いところはどこにもないというのに、運命のいたずらによって只々哀れみを受けるしかないというまでに貶められてしまった人物」"one who, free from vice, was by fortune brought so low that the plummet of pity alone could reach him" (342) として描かれている。これはまさに悪いところはどこにもないのに過酷な災いを受ける羽目に陥ったヨブに通じる姿である。この苦難に際し、ヨブはたちどころに、「我裸にて母の胎を出でたり又裸にて彼処に帰らんエホバ与えエホバ取り給ふなり」"Naked came I out of my mother's womb, and naked shall I return thither: the LORD gave, and the LORD hath taken away" (Job 1.21) と喝破する。即ち自分は神から与えられたものをすべて剥ぎ取られた生まれたままの裸の状態に戻っただけだと言うのだが、語り手は知るか知らずか、Jimmy に対しても、破産という災いを通して財産、即ち虚飾を全て剥ぎ取られた裸の人間の姿を描き出し、最後に残されたものは何なのか探ろうとする。

It was five-and-twenty years ere I saw him again. And what a change. He whom I expected to behold — if behold at all — dry, shrunken, meagre, cadaverously fierce with misery and misanthropy—amazement! the old Parisian roses bloomed in his cheeks. And yet poor as any rat; poor in the last dregs of poverty; a pauper beyond alms-house pauperism; a promenading pauper in a thin, thread-bare, careful coat; a pauper with wealth of polished words; a courteous, smiling, shivering gentleman. (341-42)

ここに見られるように、Jimmy の場合、残されたものはヨブ同様、裸の人間として「貧しさ (poverty)」に「震える (shivering)」姿以外に、「頬に咲く薔薇 (roses bloomed in his cheeks)」であり、「洗練されたことば (polished words)」であり、「微笑み (smiling)」であり、「(取り分け女性に対する) 礼儀正しさ (courteous)」であるという。「薔薇 (roses)」に関しては作品中で何度も採り上げられることになるが、語り手はその後、薔薇以外に、

And besides the roses, Jimmy was rich in smiles. He smiled ever. (343)

と再度「微笑み (smiles)」を挙げ、更に

Neither did Jimmy give up his courtly ways. (343)

と、Jimmy の「女性に対する献身的な態度 (courtly ways)」も挙げている。Jimmy が失わなかったこれらの美点について、順を追って見ていきたい。

4. 薔薇の象徴

まず第一に採り上げなければならないのは、やはり Jimmy の薔薇であるが、一体この薔薇は何を象徴しているのであろうか？

語り手は若い頃の Jimmy の様子を次のように語っている。

In his prime he had an uncommonly handsome person; large and manly, with bright eyes of blue, brown curling hair, and cheeks that seemed painted with carmine; but it was health's genuine bloom, deepened by the joy of life. (338)

ここに見られるように、語り手に言わせると、薔薇の本質は「健康 (health)」と「人生の楽しみ (the joy of life)」にあるということになる。健康面に関しては、確かに Jimmy は空白の二十五年はいざ知らず、語り手の目にとまる限り、死の床に就くまで（少なくとも身体的な）健康は失わなかった様に見える。その点、最初の試練でこの世で得た全てのを失い、裸に帰ったヨブが、更に二度目の試練で自らの健康をも奪われたのとは事情が異なっている。

次に「人生の楽しみ」についてであるが、その前に、Jimmy の薔薇は「深紅で色づけされたように見える (seemed painted with carmine)」と、その登場の時点から既にその不自然さにも目が向けられている。その点について先ず検討することとしたい。

5. " Painted Roses " と " Borrowed Wit "

Jimmy の破産から二十五年ぶりに Jimmy と再会した語り手は Jimmy の第一印象を次のように描写し、やはり何にも増してその薔薇に注目している。

But the most touching thing of all were those roses in his cheeks; those ruddy roses in his nipping winter. How they bloomed; whether meal and milk, and tea and toast could keep them flourishing; whether now he painted them; by what strange magic they were made to bloom so; no son of man might tell. But there they bloomed. (343)

ここで語り手が最後に言っている様に、確かに「薔薇はそこに咲いている (But there they bloomed)」のであるが、問題となるのはその薔薇が本物の薔薇なのか、それとも "painted" であるのか、という点である。Jimmy の運命が暗転する様を語り手は

But times changed. Time, true plagiarist of the seasons. (339)

と「時 (time)」と「剽窃者 (plagiarist)」という言葉を巧みに用いて表現していたが、語り手が薔薇の本質として捉えている「健康」も、この語り手の言葉を借りればまさに "Time" により "plagiarize" される存在であるとは言えまいか。悲運に遭ったヨブが悟った様に、人間の本質は虚飾を剥ぎ取られた下にあるとするならば、今度はその本質を求めようとする

あまり、究極にまで迫ると、Melville が *Pierre* で追求した「そこには何もない」という恐ろしい世界が現出することになる。

But, far as any geologist has yet gone down into the world, it is found to consist of nothing but surface stratified on surface. To its axis, the world being nothing but superinduced superficies. By vast pains we mine into the pyramid; by horrible gropings we come to the central room; with joy we espy the sarcophagus; but we lift the lid—and no body is there! —appallingly vacant as vast is the soul of a man! (285)

しかしながらこの物語のテーマは究極の探求ではない。たとえそれが "painted" であったとしても、確かにそこに咲いている「薔薇」が問題なのである。

ところでこの作品中には「薔薇」と並置されるもうひとつの象徴として「孔雀」が登場する。語り手は偶然所有することになり、現在居住している古い屋敷の一室について、次のように述べている。

But chiefly would I permit no violation of the old parlor of the peacocks or room of roses (I call it by both names), on account of its long association in my mind with one of the original proprietors of the mansion—the gentle Jimmy Rose. (338)

この様に語り手は Jimmy ゆかりの部屋を二通りの名で呼ぶことにより、Jimmy 自身を「薔薇」と「孔雀」という二つのものに託して言い表そうとしている様に思える。

Dillingham は以下のように、Jimmy は "peacocks" 同様、壁紙に描かれている "parrots" にも通じているという。

Jimmy is also like the parrots in the wallpaper, colorful but captive birds that echo only what they hear. (306)

まさにこれは "painted roses" に通じる "plagiarizer" としての Jimmy の一面を物語っている。"parrots" が表している Jimmy のことばの "plagiarizer" としての一面について、語り手は Jimmy のお世辞が "borrowed wit" (339) であると言っている。更にそればかりか、語り手は次のように言う。

Whenever there were ladies at the table, sure were they of some fine word; though, indeed, toward the close of Jimmy's life, the young ladies rather thought his compliments somewhat musty, smacking of cocked hats and small clothes — nay, of old pawnbroker's shoulder-lace and sword belts. (343)

かつては "a great ladies' man" (338) として知られた Jimmy も最早時代遅れの「黴臭い (musty)」存在となっていたのである。この姿が "peacocks" である旨、Dillingham は "like them [peacocks] he is to fade and decay" (306) と言っているのである。

しかしながらたとえ "borrowed" であっても、"musty" であっても、やはり薔薇同様、確かにそこに Jimmy の美点の一つ、"polished words" は存在しているのだ。語り手は "perpetual roses" と "faded peacocks" を対比して以下の様に述べている。

But still again, every time I gaze upon those festoons of perpetual roses, mid which the faded peacocks hang, I bethink me of those undying roses which bloomed in ruined Jimmy's cheek. (345)

この "perpetual roses" に託されたものとして、次に「人生の楽しみ」を採り上げ、併せて残された Jimmy の美点である "smiling"、"polished words"、"courtly ways" について検討してみたい。

6. " The Joy of Life " と " Give Pleasure "

「今や私は誰も信じられない」"I can trust no man now." (341) と言い、一切の人付き合いを断った Jimmy と二十五年の歳月を経て再会する際、人生に絶望し、人間嫌いに陥った陰気な老人を想像していた語り手であるが、実際に会ってみると、Jimmy の頬には昔と変わらぬ薔薇が咲いていた。その謎に対し、語り手は次の様に推測する。

Though at the first onset of his calamity, when creditors, once fast friends, pursued him as carrion for jails; though then, to avoid their hunt, as well as the human eye, he had gone and denned in the old abandoned house; and there, in his loneliness, had been driven half mad, yet time and tide had soothed him down to sanity. Perhaps at bottom Jimmy was too thoroughly good and kind to be made from any cause a man-hater. And doubtless it at last seemed irreligious to Jimmy even to shun mankind. (342)

語り手は Jimmy が生まれつき持つ善良さと親切心のため、「人間嫌い (man-hater)」に徹しきれなかったというのだが、果たしてこの「善良 (good) さ」と「親切 (kind) 心」を象徴するために Jimmy の美点としての「薔薇」と「微笑み」、「洗練された言葉」、「女性に対する献身的な態度」が挙げられていたのであろうか？

Jimmy は知人宅を訪問する際、図書館に通い、最新の情報を集め、しかも訪問先で長居して嫌な顔をされない限度を巧みに計る努力を欠かさない。そこには単なる「親切心」や「善意」では済まされない事情、つまり日々の糧を得るため、まさに生きるためという切実な事情があるのだ。訪問先でパンを食べる Jimmy の様子は以下のように描かれている。

How forlorn it was to see him so heartily drinking the generous tea, cup after cup, and eating the flavorful bread and butter, piece after piece, when, owing to the lateness of the dinner hour with the rest, and the abundance of that one grand meal with them, no one besides Jimmy touched the bread and butter, or exceeded a single cup of Souchong. (343)

金持ちたちにとってパンは無しでも済まされるものであるのに対し、Jimmyにとってパンは無しでは済まされぬものなのである。このような極貧状態を生きるJimmyのモデルは"those ruddy roses in his nipping winter"を体現した人物ということになるが、これは先に検討したヨブから更にキリストを仄めかせる記述となっている。友人に裏切られたJimmyは弟子に裏切られたキリストと相通じるところがあるにせよ、むしろ注意しなければならないのは友人宅を訪ねる際、ひたすらパンのみを求めるJimmyの姿である。これは、荒野で四十日四十夜断食したイエスが悪魔の試みを受けた際、申命記からの引用を以て答えた言葉、「人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出づる凡ての言による」"Man shall not live by bread alone, but by every word that proceedeth out of the mouth of God."

(Matt. 4.4)を想起させる。Jimmyはキリストのこのことばに真っ向から対抗し、"Man shall live by bread alone."と言いたがっているかの様だ。また「神の口より出づる凡ての言」の信憑性についても、語り手がJimmyを評した言葉を借りれば、イエス自身、申命記の「剽窃者 (plagiarist)」ではないか、とさえ言えるのである。

しかしながら、やはり人はパンのみにより生きるのではないことを語り手は次のように説明している。

Though in thy own need thou hadst no pence to give the poor, thou, Jimmy, still hadst alms to give the rich. For not the beggar chattering at the corner pines more after bread than the vain heart after compliment. The rich in their craving glut, as the poor in their craving want, we have with us always. So, I suppose, thought Jimmy Rose. (344)

ここに描かれている「飽満の中にあつてなお満たされぬ富者 (the rich in their craving glut)」の存在が即ち「人の生くるはパンのみに由るにあらず」という事実を物語っており、またその「富者への施し物 (alms to give the rich)」を持った存在としてJimmyがクローズアップされてくるのである。それでは「富者への施し物」とは一体何なのか？ 上記に続くイエスの言葉、「神の口より出づる凡ての言」に相当するものとしてここで登場するのが「お世辞 (compliment)」、即ちJimmyの"polished words"であるのだが、この点に関し、語り手は先に非難した言葉の"plagiarist"としてのJimmyを、今度は一転して以下のように弁護している。

Ah, Jimmy, Jimmy! Thou didst excel in compliments. But it was inwrought with thy inmost texture to be affluent in all things which give pleasure. And who shall reproach thee with borrowed wit on this occasion, though borrowed indeed it was? Plagiarize otherwise as they may, not often are the men of this world plagiarists in praise. (339)

ここで言われている「喜びを与える (give pleasure)」という表現が、かつて繁栄を誇った若かりし頃のJimmyの薔薇を物語る「人生の喜び (the joy of life)」に通じ、あるいはそれに取って代わっている様に思える。「飽満の中にあつてなお満たされぬ富者」が示しているように、人が「喜びを与え」られることに飢えている限り、Jimmyにとってたとえ自らの「人生の喜び」は失われても「喜びを与える」対象は失われてはいない。Jimmyにとって、か

つては「人生の喜び」の、そして現在はこの「喜びを与える」という行為の外見上の具体的な現れが「微笑み」であるともいえる。語り手はJimmyの「微笑み」について以下のようになっている。

The lordly door which received him to his eleemosynary teas, knew no such smiling guest as Jimmy. In his prosperous days the smile of Jimmy was famous far and wide. It should have been trebly famous now. (343)

Jimmyにとって「(人に) 喜びを与える」ことは、パン同様、最早自らの生存の拠り所とさえなっている。それ故、その行為の現れとしての「微笑み」には、かつての自らの「人生の喜び」を表す「微笑み」の「3倍 (trebly)」に値する価値があるのである。

そしてもう一つ、Jimmyの美点として挙げられていた「女性に対する献身的な態度」もまさに「金持ち (the rich)」同様「虚栄心に満ちた存在 (the vain heart)」として描かれている女性に「喜びを与える」行為に他ならない。それに関して語り手は言う。

But all women are not vain, or if a little grain that way inclined, more than redeem it all with goodness.

女性を単なる虚栄心の固まりと見るのは間違いで、そこにはそれに勝る「善意 (goodness)」が存在しているというわけだが、ここで再度登場した「善意」に関して、物語が終わりに近づく頃、語り手は些かためらった後、死の床に伏すJimmyを世話する若き女性とJimmyとの間の "one little incident" を打ち明ける。

She had brought some little delicacies, and also several books, of such a sort as are sent by serious-minded well-wishers to invalids in a serious crisis. Now whether it was repugnance at being considered next door to death, or whether it was but the natural peevishness brought on by the general misery of his state; however it was, as the gentle girl withdrew, Jimmy, with what small remains of strength were his, pitched the books into the furthest corner, murmuring, "Why will she bring me this sad old stuff? Does she take me for a pauper? Thinks she to salve a gentleman's heart with Poor Man's Plaster?" (344)

「まじめな性格の篤志家が、危篤状態にある病人に送ってくれる類の (of such a sort as are sent by serious-minded well-wishers to invalids in a serious crisis)」と、非常に慎重かつ遠回しな表現が用いられてはいるが、ここで言及されている "books" は、明らかに聖書のことを指している。それをJimmyは「貧者の膏薬 (Poor Man's Plaster)」と呼んでいるのである。語り手により時代遅れだと慥無礼に罵倒されてきたJimmyはここに至ってこの「貧者の膏薬」こそまさに時代遅れそのものの "sad old stuff" ではないかと言っている様にさえ思える。ここでの女性の好意に対しJimmyが皮肉混じりに「貧者の膏薬」と言う言葉を用いたのは、イエスの頭に高価な香油を注いだベタニアの女との違いを想起しての発言であろう

か。この行動に対してイエスは「此の女は、なし得る限をなして、我が体に香油をそそぎ、あらかじめ葬りの備をなせり」"She hath done what she could: she is come aforehand to anoint my body to the burying." (Mark 14.8) と言っている。どうやらいかに善意に満ちていようとも、Jimmy を看取った篤志家の女性には "give pleasure" の精神が欠けていた様だ。親切心も善意も、金持ちの食卓のパン同様、所詮虚飾に過ぎず、それを剥ぎ取ったあとに残る生存の拠り所となる存在とは成り得ないのである。

そして物語の最後を語り手は以下のように結んでいる。

Transplanted to another soil, all the unkind past forgot, God grant that Jimmy's roses may immortally survive! (345)

ここでは最早 Jimmy Rose ではなく、"Jimmy's roses" と言われており、語り手は Jimmy という人格を離れた薔薇の不滅性を祈らずにはいられない。語り手は Jimmy の死後も、喜びを与え続けているその薔薇の不滅性に思いを馳せているのである。そしてまたそういった語り手を通し、作者自身も自らの人格・人生を超越した自らの文学の行く末について改めて思いを馳せている様に思えてならない。

Works Cited

- Bible Classical Japanese*. 1887. Tokyo: Japan Bible Society, 1982.
- Dillingham, William B. *Melville's Short Fiction: 1853-1856*. Athens: Univ. of Georgia Press, 1977.
- Fisher, Marvin. *Going Under: Melville's Short Fiction and the American 1850s*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1977.
- Holy Bible: Authorized King James Version*. New York: Delair, 1982.
- Melville, Herman. "Jimmy Rose," in *The Piazza Tales and Other Prose Pieces, 1839-1860*, vol. 9 of the Northwestern-Newberry edition of *The Writings of Herman Melville*, ed. Harrison Hayford et al. Evanston & Chicago: Northwestern Univ. Press & Newberry Library, 1986. 336-45.
- . *Moby-Dick or The Whale*, vol. 6 of the Northwestern-Newberry edition of *The Writings of Herman Melville*, ed. Harrison Hayford et al. Evanston & Chicago: Northwestern Univ. Press & Newberry Library, 1988.
- . *Pierre or The Ambiguities*, vol. 7 of the Northwestern-Newberry edition of *The Writings of Herman Melville*, ed. Harrison Hayford et al. Evanston & Chicago: Northwestern Univ. Press & Newberry Library, 1971.
- Sealts, Merton M., Jr. *Pursuing Melville 1940-1980*. Madison: Univ. of Wisconsin Press, 1982.